

福山市宇治島北の浜遺跡第2次発掘調査

古瀬清秀・小池伸彦
小池やよい・小澤毅
鈴木康之・高橋彰子

1. 遺跡の概要と調査の経過

宇治島北の浜遺跡は広島県福山市走島町宇治島前509に所在する。宇治島は燈灘東端に浮ぶ小島で、北東4.6kmには奈良時代祭祀遺跡で著名な大飛島を臨む、広島県東部と香川県西部に挟まれた瀬戸内海のほぼ中央に位置する。島の周囲約4.25kmで、東西に並ぶ標高86.3mと117.3mの2つの小高い高まりが接し合って、1島として成り立っている。この両山塊の間の北面する湾入部には、低平な砂浜浜堤が東西に長く形成されていて、遺跡はこの浜堤上に立地する。浜堤は東西約90m・南北約35mで、幅は中央部が、潮流、季節風の影響をうけて後方に拡張されており、最も広がっている。浜堤の最高位は+1.5m(1983年10月3日満潮位レベルを0とする)で、平均+1mとなっている。浜堤は潮流の関係で東から西に向って形成されたようで、西端で尖るように狭くなる。浜堤の後背部には湿地が形成されていて、-30cmの低地となっており、典型的な海岸地形の自然堤防と後背湿地の組み合わせとなっている。

なお、今年度実施した周辺部の分布調査では、浜堤の西側にさらに低平な段丘状の平地が形成されており、波蝕崖断面から古墳時代須恵器片、土師器片を採集した。このことから、北の浜遺跡はさらに西方に広がっていることが予想できる。さらにまた、北の浜から低い峠を越えた南側海岸でも、砂浜後方の高さ1.5m前後の波蝕崖断面から須恵器片、弥生土器片、安山岩片などを採集した。ここも距離的にみて、北の浜遺跡の内に含めてもよからう。

さて、宇治島北の浜遺跡では1983(昭和58)年10月に第1次発掘調査を実施したが、この成果として浜堤のほぼ全域に、縄文時代中期以降、中世に至る各時期の遺構・遺物が埋存しており、特に奈良～平安時代の祭祀遺跡であることも確認された。しかし、それを示す明瞭な遺構を検出するには至っていなかった。このため、1984(昭和59)年度も引続き、この遺跡を内海文化研究室考古学班の研究調査地として選定し、潮見浩教授の指導のもとに、1984(昭和58)年10月3日～13日までの10日間、第2次発掘調査を実施した。

今年度の調査の主眼は、奈良時代祭祀遺跡としての性格を明確にすることにあった。昨年度の調査では、祭祀に関連するとみられる三彩・緑釉・灰釉など施釉陶器片は、浜堤東半部に限って集中して出土することが確認されており、さらにまた、遺跡東端の浜堤と山裾の接する地点で、奈良時代遺物がかつて出土しているので、この地点に建設されていた廃屋を撤去して、ここに第12～14トレンチの調査区を設定した。

この結果、この調査区では浜堤から山裾に向かう緩い傾斜面上に、拳大～人頭大の礫石を敷いた石敷面が確認され、この遺構上から須恵器を主体とし、三彩小壺片など施釉陶器を含む奈良時代の遺物群を検出した。これらの遺構・遺物が宇治島北の浜遺跡における海上祭祀の実態を示すものとして、注目された。

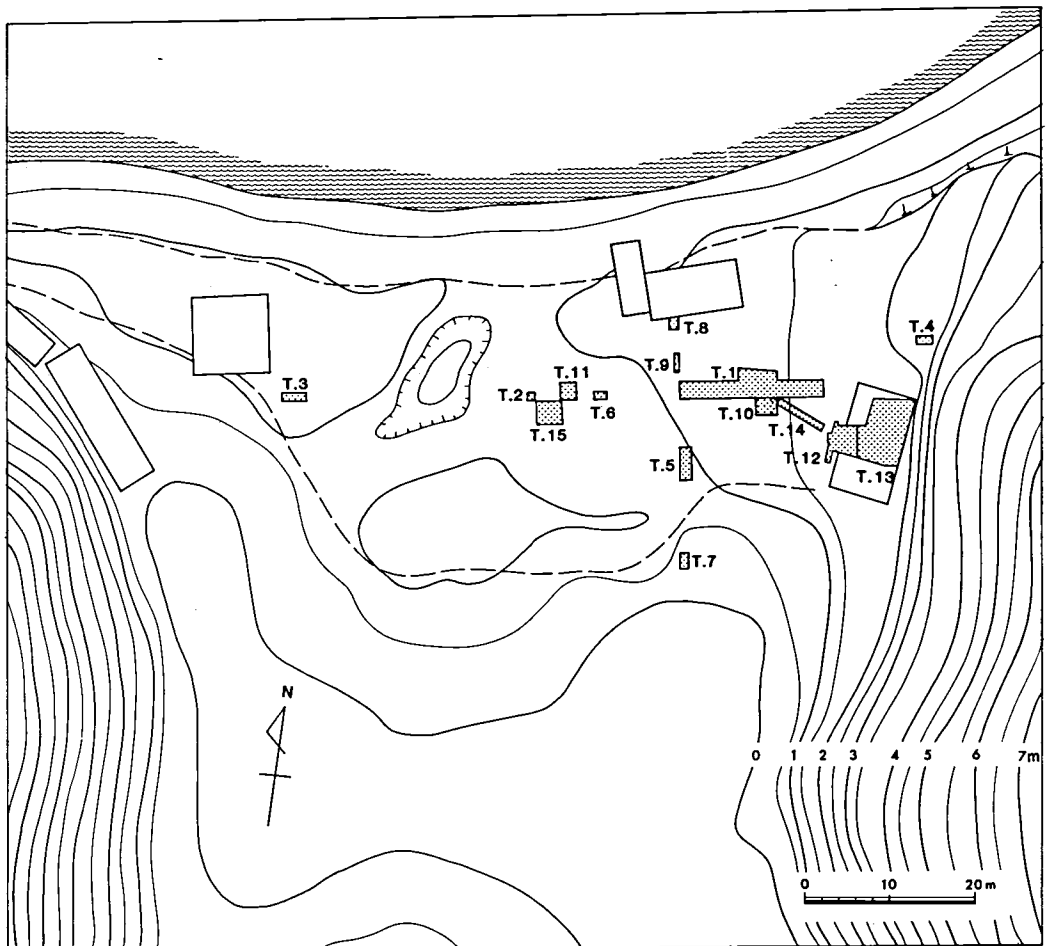
なお、第15トレンチは、浜堤中央部に瀬戸内海における海水準変動及び浜堤形成のあり方を探る目的で設定したが、須恵器、土師器、縄文土器などが出土している。

発掘調査は古瀬清秀、小池伸彦・小池やよい・小澤毅（広島大学院D.C.）、高橋彰子（広島大学院M.C.）、藤原幸（広島大生）の6名が全期間あたった。この他、兵庫教育大学助教授成瀬敏郎氏・同学生井上氏、広島大学文学部助教授中田高氏・同学生辻氏が途中参加され、瀬戸内海地域の海水準変動をめぐる地理学的調査を実施された。また、香川大学教育学部助教授丹羽佑一氏、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館 松本敏三氏・岩橋孝氏、香川大生が途中参加され、調査協力をえた。10月8日には、潮見教授、倉敷考古館長間壁忠彦氏、広島県文化財保護審議委員村上正名氏、広島大学文学部講師河瀬正利氏、福山市教育委員会文化課長 赤塚弘光氏・同課 園尾 裕氏・柴田信次氏の来島があり、指導・助言をえた。（古瀬清秀）

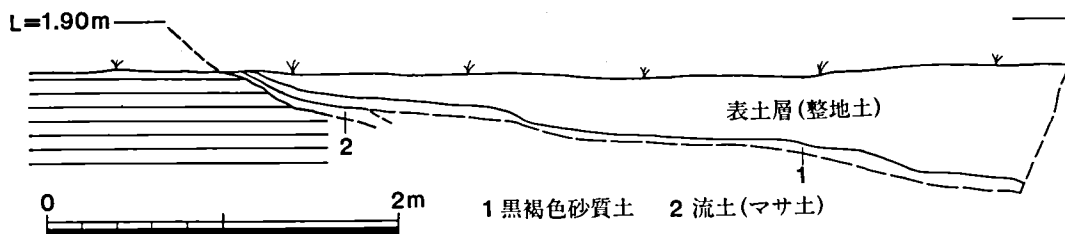
2. 調査区の概要と遺構

1) 調査区の設定（第1, 2図）

昨年度の第1トレンチの遺物出土状況、及び第5トレンチの集石遺構などを考慮に入れ、遺跡地東端の山脚部（廃屋のある地点）に第12, 第13トレンチを設けた。両トレンチは共に不整形であるが、これは廃屋のコンクリート壁によるものである。また第12トレンチの南北、及び西に突き出た部分は、後述する石列の状況を把握するために拡張したものである。ここでは、表層として、建物を建て



第1図 宇治島北の浜遺跡地形図（アミ目はトレンチ）



第2図 第12・13トレンチ南壁セクション

た際の整地土が5～20cmの厚さで存在し、その下に第1層（黒褐色砂質土層）が堆積する。これを約5cm掘った段階で多量の遺物、及び石敷き遺構を確認したため、第1層は未完掘である。遺物は奈良時代、平安～鎌倉時代の須恵器・土師器・土製品で、第1次調査の第1層上位に相当する。地山が東側（山側）に向かって上がっていること、廃屋の整地の際に若干の削平を受けていることから、第1層は東端部では極めて薄くなっている。

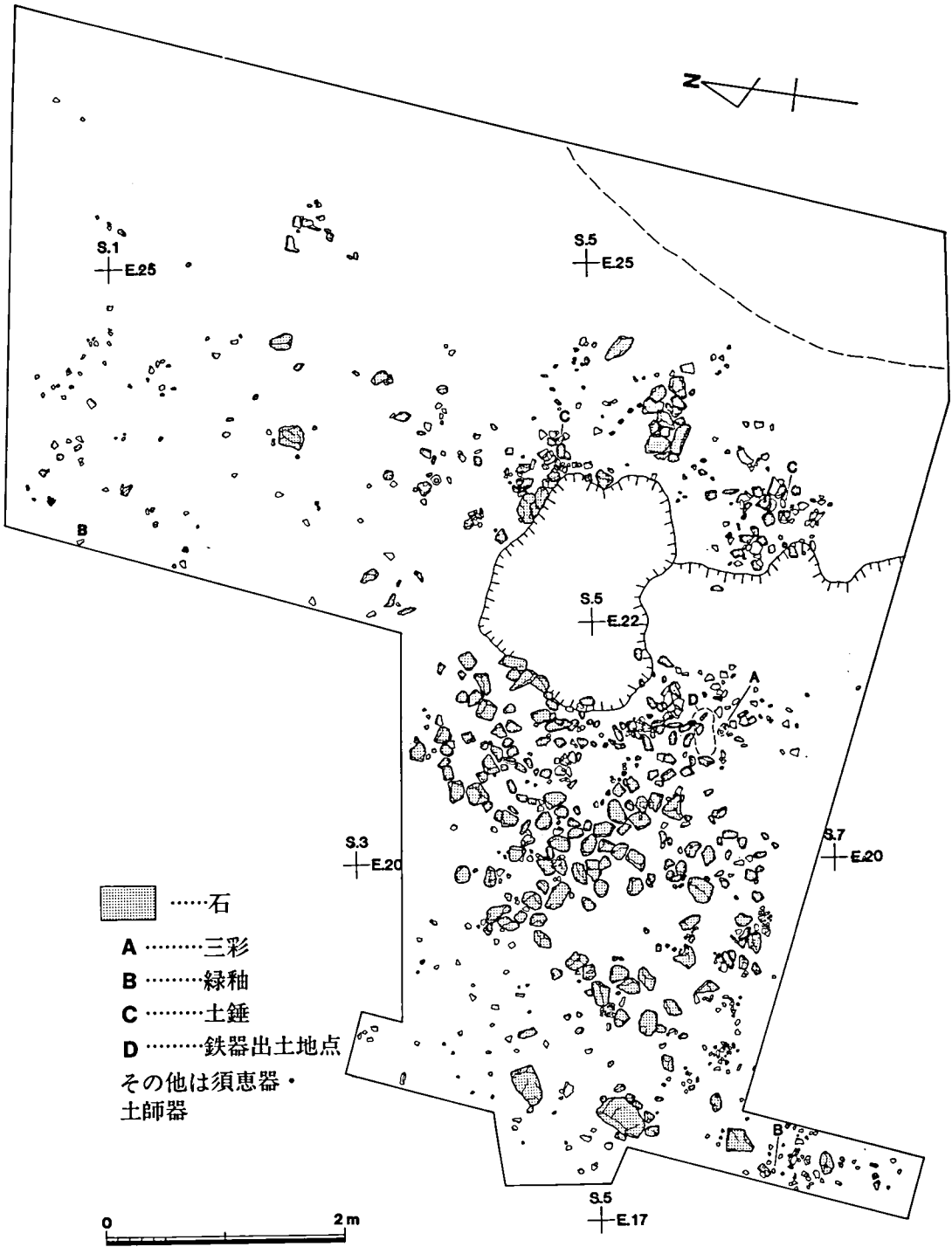
これら両トレンチと第1トレンチとの関係を見るために、幅1m・長さ6.5mの第14トレンチを設けた。20～30cmの厚さの表層の下に第1層（黒褐色～灰褐色砂質土層）が堆積する。厚さは約50～60cmで、上半部は真砂土が混在する。東側がわずかに高いが、ほぼ水平な堆積状況を示し、包含層は第1次調査のそれと対応する。第1層の上位からは奈良時代、平安～鎌倉時代ないしそれ以降の須恵器・土師器・製塩土器が、また第1層中位からは古墳時代の須恵器・土師器・製塩土器が出土している。

第2、第11トレンチの間に設けた第15トレンチ（3×3m）の包含層も第1次調査におけるものと同様である。（小池やよい）

2) 遺構（第3図、図版第2）

今回の調査では第12・13トレンチにおいて石敷き遺構を検出した（第3図）。遺構は、矢立山の西側山脚と浜堤との境界から西へ広がり、遺構のすぐ東から山裾が立ち上がる。海岸線からは30数mないし40m程離れており、満潮時の汀線を基準にすると標高は約0.6～1.5mの間にある。東西方向に主軸をもち、長辺が約7m、短辺が約3mあり、輪郭はあまり明確でないが、長方形ないし長楕円形の平面形をもち、西側が低くなっている。第1次調査で検出された第5トレンチの集石遺構とは20m前後の距離があり、また同じく第1トレンチで検出された礫群と奈良～平安時代の遺物群からは10m前後離れている。

石敷き遺構はアトランダムに礫の集まる集石部分と石列とが検出できた。第1次調査で設定した第1トレンチ西南隅の基準杭から東へ約21.5m（E21.5）南へ約5m（S5）の地点がほぼ集石部分の中心とみられる。この中心付近は、東側が長さ約2m・幅約1mにわたり盗掘を受け、原状をとどめないが、西側には幅1～1.5mにわたって比較的密に礫が集中している。そしてさらに西側へ向かうと礫はまばらとなり、第12トレンチ西端部には長さ0.2～0.4mの大小4個の礫からなる石列がみられる。すぐ西側の第14トレンチの調査では集石・石列が認められず、この石列が石敷き遺構の西限を示すものとみてよい。第13トレンチの北半部では、小ぶりの礫とやや大きめの礫1個がわずかに散見されるのみであり、石敷き遺構の一部とは考えられず、後世に散乱したものであろう。石列北側の拡張トレンチ内北端にも礫がみられず、第12トレンチの北辺をこえて石敷き遺構が北に広がる可能性は薄い。遺構の南限については、廃屋が遺構上にあるため、調査が困難であり確認できなかった。しかし、第13トレンチの南辺付近では遺物・礫ともに分布は希薄であり、また石列もこれ以上南へ延びるようではないため、集石部分が南へ広がるとしてもさほど大きくはならないであろう。従って集石部分の中心点が今回想定した点よりもはなはだしく南へずれることはないと考えられる。石敷き東端部は山脚がせまっているが、地山は削平されており、平坦面をなしている。しかしこの平坦面が石敷き



第3図 第12・13トレンチ 石敷き遺構及び遺物出土状況

遺構に伴うものか、廃屋のための整地面であるのか、今回の調査では明らかにし得なかった。また、石列などは認められなかったが、付近のレベルが廃屋整地土上面に近く、攪乱の可能性もあるため、東端部に石列が設けられなかったとは断言できない。いずれにしても、地山がせり上がり、集石下層の包含層が薄くなる部分であり(第2図)、検出した集石部分の東端は石敷き遺構の東端部にごく近いとみてさしつかえない。

遺構を構成する礫は拳大～長さ0.4m・幅0.2m程度の大きさで、海岸で普通に見られる角のとれた花崗岩である。礫は傾斜面に並べられ中心点付近では2段に積まれ、周辺では1段である。中心部では周辺より0.1～0.2m高いが、礫の転落を見込んでそれほど高く積まれてはいない。西端の石列は礫の大きさが北から、約0.3×0.2m、約0.4×0.3m、約0.2×0.2m、約0.2×0.1mであり、ほぼ等間隔に南北に並ぶ。石列の礫は比較的大きく、また北から2番目にある最大の礫の裾周囲に拳大の礫が詰石として配される。この最大の礫を石列の中心とすれば、石列北端の礫のさらに0.7～0.8m北の位置に、石列南端の礫と同大の礫があったことが予想できる。伴出遺物についてみると、ほぼ奈良時代に限定できる施釉陶器(三彩・緑釉)、須恵器(長頸瓶・平瓶・広口台付壺などを含む)、土師器、土製品などが主体となって、石敷き遺構とはほぼ同一の平面に広く分布する。また、遺構の下層は第1次調査の第1層中位に相当し、古墳時代の遺物が出土する。おそらくこの第1層中位の上面が地表面の時に、その斜面をなら整地することなくそのまま利用して石敷き遺構を形成したものと考えられる。なお礫の下からも奈良時代の遺物が出土し、礫が転落していることがうかがえる。

以上のように、この石敷き遺構は奈良時代のなんらかの祭祀場と考えられる。ただ平安時代末～鎌倉時代の土師器などが遺構と同一レベル付近に分布しており、祭祀行為の後、遺構がすぐに土層に覆われてそのまま安定していたとは言い難い。従って祭祀場のオリジナルな形について詳細は知り得ないが、その構造について次の諸点が指摘できる。(1)山裾に接する場所に立地し、祭祀場のために特に斜面を整地することはなく、自然地形を利用するようである。(2)祭祀場は石列あるいは山脚によって2方向(この場合東西)を区画する。(3)区画内に集石部分を設け、集石部分は中心部(中心点の周囲幅1～1.5mの範囲)が周辺よりも若干高くなるように礫が密に積まれる。(4)石列に使用される礫は4～5個と考えられ、他の礫に比較して大きめで、5個で石列を形成すると考えた場合、中央の礫は小礫に囲まれる。このように本遺跡の奈良時代の祭祀場の構造について、いくつかの点が明らかとなったが、不明な点も残されている。すなわちオリジナルな礫の並べ方が検出遺構のようにアトランダムなものであったかどうか、また山脚に接する部分の石列の有無、さらに山脚の地山を平坦に削平して祭壇などに使用したのかどうかなど、今後に残された課題である。(小池伸彦)

3. 出土遺物

1) 第12～14トレンチ出土遺物(第4～8図・図版第3～5)

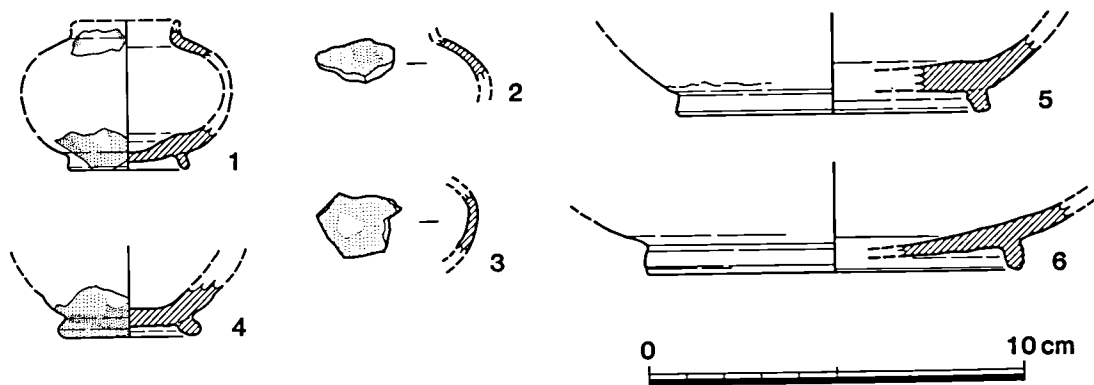
古墳時代から中世にかけての長期にわたる遺物が出土しているが、前述の石敷き遺構に伴う奈良時代のものが中心を占め、その他の時期の遺物は比較的少ない。

i) 遺構に伴う遺物

施釉陶器・須恵器・土師器・土錘・鉄製品が出土しているが、量的には須恵器が大半を占める。いずれも整地土下の第1層黒褐色砂質土および攪乱層中より検出されたもので、石敷き遺構に伴う遺物と考えられる。ほとんどが奈良時代に属する。

a) 施釉陶器(第4図)

三彩陶器(1～4) 奈良三彩の小壺2個体分の破片が出土している。1～3は同一個体とみられ、高台内側を含む外面全体、内面の口縁部付近と底部中央に釉が掛けられている。外面の釉は白色を基調とし、緑色・褐色釉が斑文状に掛けられているが、全体の文様構成は明らかでない。内面には白色



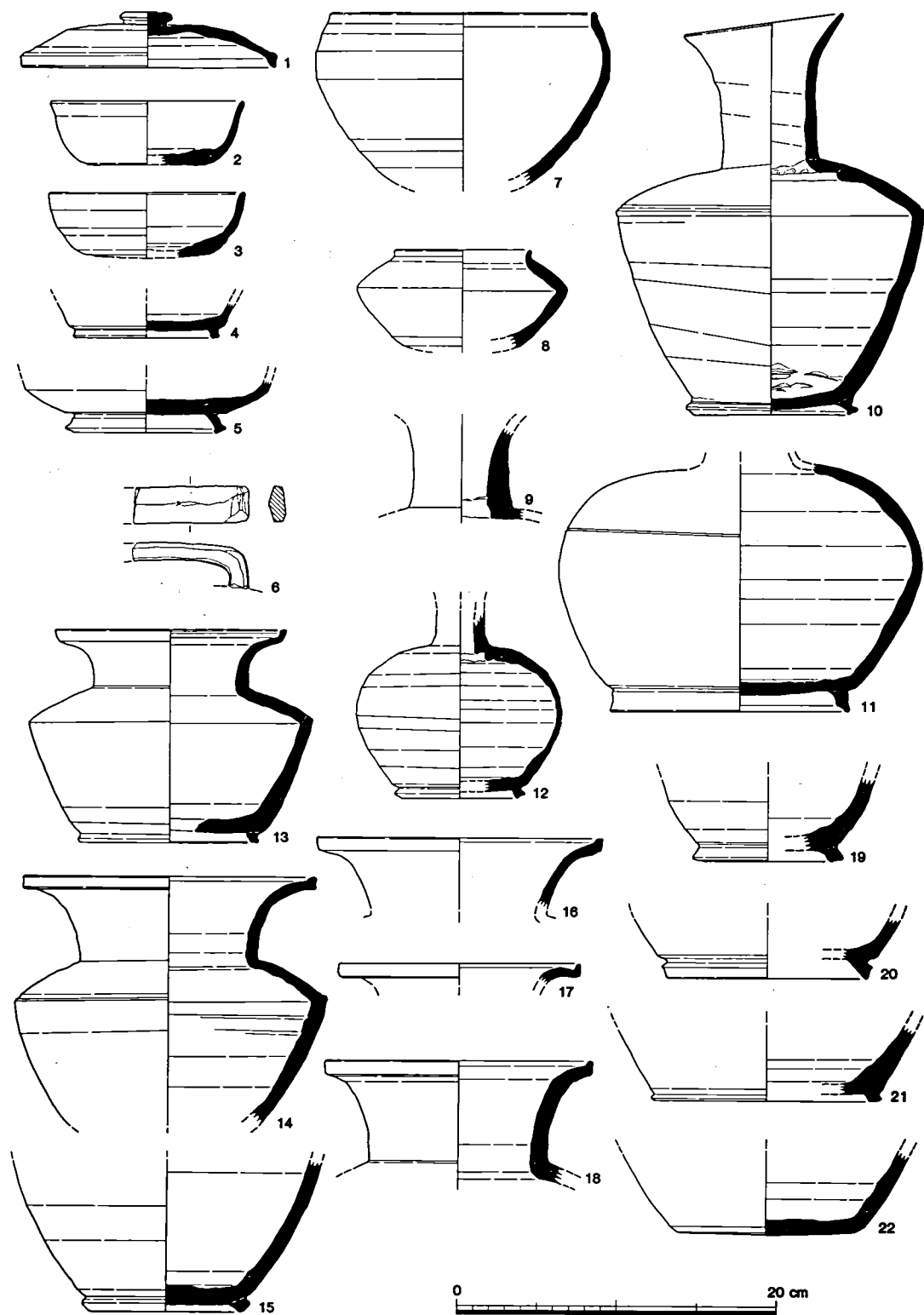
第4図 第12～14トレンチ出土 施釉陶器

釉のみが認められる。体部内外面にはロクロナデの痕跡を残し、高台は粘土紐を貼り付けたのち、ヨコナデによって形が整えられている。胎土は微砂を含むが精良で、黄白色を呈する軟質なものである。4は底部の破片のみで、施釉方法・成形手法・胎土などは前者と共通するが、器壁は若干厚く、高台も大ぶりなものが付けられている。

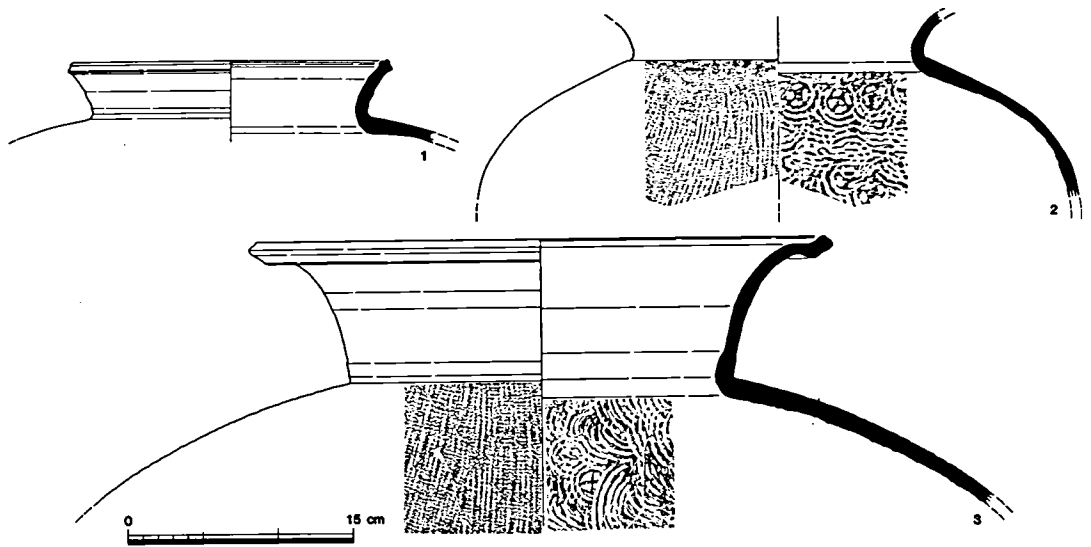
緑釉陶器（5・6） 椀・皿および長頸瓶の頸部・底部の小片が出土している。5は椀の底部で、体部内外面にロクロナデが施され、貼り付け高台をもつ。高台部を除く全面に濃緑色の釉がやや厚めに掛けられ、釉のたまりができています。胎土は微砂を多く含み、灰褐色を呈する須恵質のものである。6は皿の底部で、内外面にはロクロナデ、外面には回転ヘラ削りが施されている。高台は削り出し高台である。釉は内外面全体に薄く刷毛塗りで施されているが、褪色が著しく黄白色を呈している。胎土はきめ細かく、淡黄褐色を呈するが、焼成は良く比較的硬質である。これらの緑釉はいずれも胎土が須恵質に近く、平安時代のもと考えられる。また長頸瓶には図示できる破片がないが、胎土は軟質で、三彩などと同じく奈良時代のものであろう。

b) 須恵器（第5・6図）

杯・鉢・罎・平瓶・長頸瓶・細頸瓶・広口壺・甕などが出土している。量的には広口壺の占める割合が最も大きく、瓶類もかなり多いが、反面、杯などの小型品は比較的少ない。杯蓋（第5図—1）は円盤状のつまみをもち、頂部を回転ヘラ削りする。杯身（2～5）には無台のもの（2・3）と有台のもの（4・5）があり、後者はさらに通有の形態（4）と、高い高台をもち、体部外面に明瞭な稜を有するもの（5）とに分けられる。いずれも体部内外面にロクロナデが施され、2～4の底部外面には回転ヘラ切り痕がそのまま残されるが、5ではナデ消されており、高台内周に沿って高台を貼り付ける際の爪圧痕をとどめる。鉢（7）は内傾する口縁部に尖りぎみの底部をもつと思われるもので、体部外面下半に回転ヘラ削りを施す。焼成は甘く、黄灰褐色を呈する。罎（8）は短く立ち上がる口縁部をもち、体部は「く」の字状に屈折する。外面の底部付近を回転ヘラ削りしている。比較的精良な胎土で、焼成は良好である。平瓶（6）は把手の破片が出土している。長軸に沿ったヘラ削りによる面取りが施される。長頸瓶（9～11, 19・20）は、肩部に稜がつき、底部がすぼまるもの（9・10・19）と、ゆるやかに張る横幅の広い体部をもち、底径も大きなもの（11・20）とがある。10は筒形の頸部に外反する口縁部をもち、端部は単に丸くおさめている。肩部より上は3段に接合されており、頸部取り付け部分の内面には指頭痕が残る。肩部には1条の沈線がめぐり、体部下半は回転ヘラ削りされる。高台は外方に張り出し、丁寧なロクロナデ調整が施されている。また内底面周辺部には同心円文の当て具痕が残り、高台を取り付ける際、あるいはヘラ削りの際にシッタとして使用されたことが窺われる。口縁部から肩部外面にかけてと底部内面に自然釉が掛かる。9も同じく、3段接合による頸部の破片で、外面に自然釉が付着している。19は長頸瓶の底部と思われ、内面はロクロナデ、外面は回転ヘラ削りののち部分的なナデ調整が施される。高台は若干外方に張り出す断面方形



第5図 第12~14トレンチ出土 奈良時代の須恵器(1)

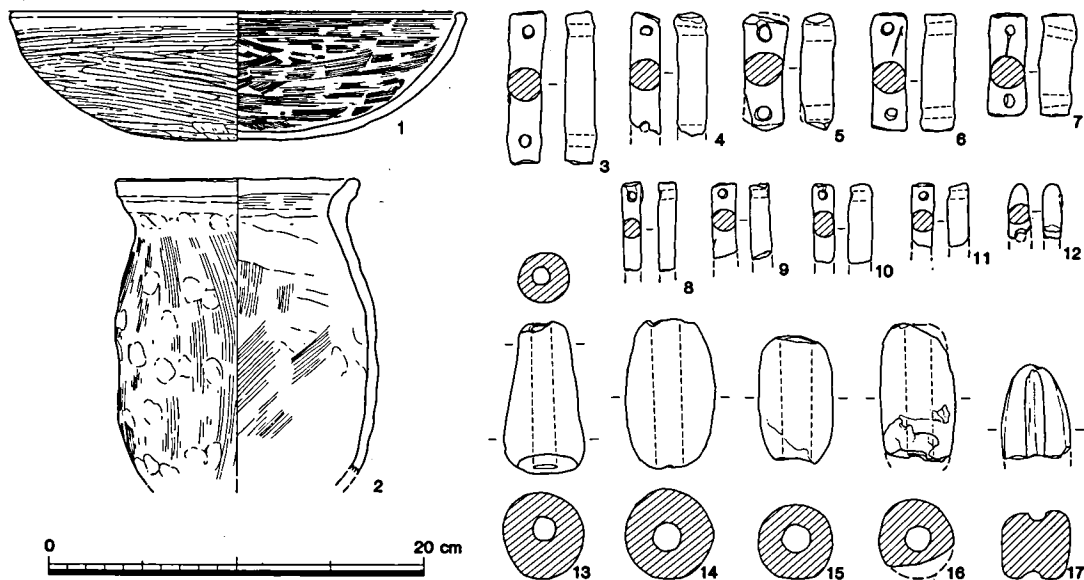


第6図 第12~14トレンチ出土 奈良時代の須恵器(2)

のもので、先端部はやや凹む。11は丸く張り出す肩にやや細い頸部が付き、底部は平らで径も大きめである。体部内外面にはロクロナデが施され、肩部には一条の沈線がめぐる。高台は貼り付けで、外側が接地する。肩部外面および内底面中央部には自然釉が厚く掛かっている。20も同様の体部をもつ長頸瓶の底部かと思われるが、こちらは高台の内側が接地する。内面にはロクロナデ、外面には回転ヘラ削りが施される。また内面に自然釉の付着が認められる。細頸瓶(12)は、球形の体部に細い頸部が3段接合によって付けられており、体部外面上半と体部内面にはロクロナデ、体部外面下半から底部にかけては回転ヘラ削りが施されている。また、頸部内面にも削り調整が認められる。高台は外方に張り出す断面方形のものが貼り付けられており、内側が接地する。胎土はきわめて精良で、淡灰褐色を呈し焼成も良い。広口壺(13~18, 21)は、外反する頸部に上方へ折り曲げた口縁部が付き、肩に稜を有するもので、肩より下には回転ヘラ削りが施され、底部には断面方形の高台が貼り付けられている。13は底部中央に焼成後意図的な穿孔が行われており、肩および内底面には自然釉が付着する。14・15は同一個体と思われ、肩に一条の沈線がめぐる。16・17・18は口縁部の破片であり、いずれにも自然釉の付着が認められる。21は底部の破片で、低い高台が貼り付けられている。22は無高台の壺の底部で、内面はロクロナデ、外面には回転ヘラ削りが施される。内底面中央部と外底面には指頭痕を残す。甕(第6図1~3)は比較的小型のもの(1・2)と大型のもの(3)があり、5個体分の破片が出土している。1は外反する短い口頸部をもち、体部外面は平行叩きの上にカキ目調整、内面は同心円文の当て具痕の上にナデ調整が施されている。2は口縁部を欠失するが、外方へ開く頸部を有し、体部外面は平行叩きの上にカキ目調整を行う。内面はいわゆる車輪文の当て具痕を残すが、頸部付近はロクロナデを加えている。3は外反する頸部に上方に短く屈曲する口縁部がつく大型の甕で、体部外面には擬格子状の平行叩きが施され、内面には2とは異なる「車輪文」の当て具痕を残す。

c) 土師器(第7図—1・2)

量的にはごく少ない。1は大ぶりの碗で、口縁部付近をヨコナデするほかは、外面の大半をヘラ磨きし、底部には不定方向のヘラ削りを加える。内面はほぼ全面にわたって細かいハケ目調整が施され、内外面全体には赤色顔料が塗られている。2は粗雑な作りの小型甕形土器で、口縁部付近はヨコナデ、外面は縦方向のハケ目調整を行っており、顕著な指頭痕をとどめる。内面は頸部に横方向のハケ目を残し、体部下半に縦~斜方向のハケ目調整、上半に斜方向のナデ調整を施す。胎土には多量の砂粒を含み、製塩土器として製作されたものとも考えられる。



第7図 第12～14トレンテ出土 奈良時代の土師器・土錘

d) 土錘 (第7図3～17)

棒状土錘12点, 管状土錘12点, 有溝土錘1点が出土している。

棒状土錘 (3～12) 重量30～35gの太めのもの(3～7)と, 現存重量10g以下の細いもの(8～12)とがある。角張った両端部に近接して円孔を穿ったタイプ(3～11)が大部分であるが, 端部が丸く, 中寄りに穿孔をもつ例(12)も1点みられた。

管状土錘 (13～16) 完形品の重量は110～180gで, 棒状のものの周りに粘土を巻きつけて成形しており, 胎土は一般に細かいが, 多量の粗砂を含む例(14)もみられる。

有溝土錘 (17) 現存重量70gの破片である。砲弾状に成形した粘土塊の両側面に棒を当てて溝を作り出している。

e) 鉄製品 (第8図16～18)

いずれも欠損品であるため, 器種, 機能, 用途は不明である。17は鉄刀の可能性も考えられる。

18は側縁端部を屈曲させた細長い板状品であるが, 端部は丸味をもち, 刃はもたない。

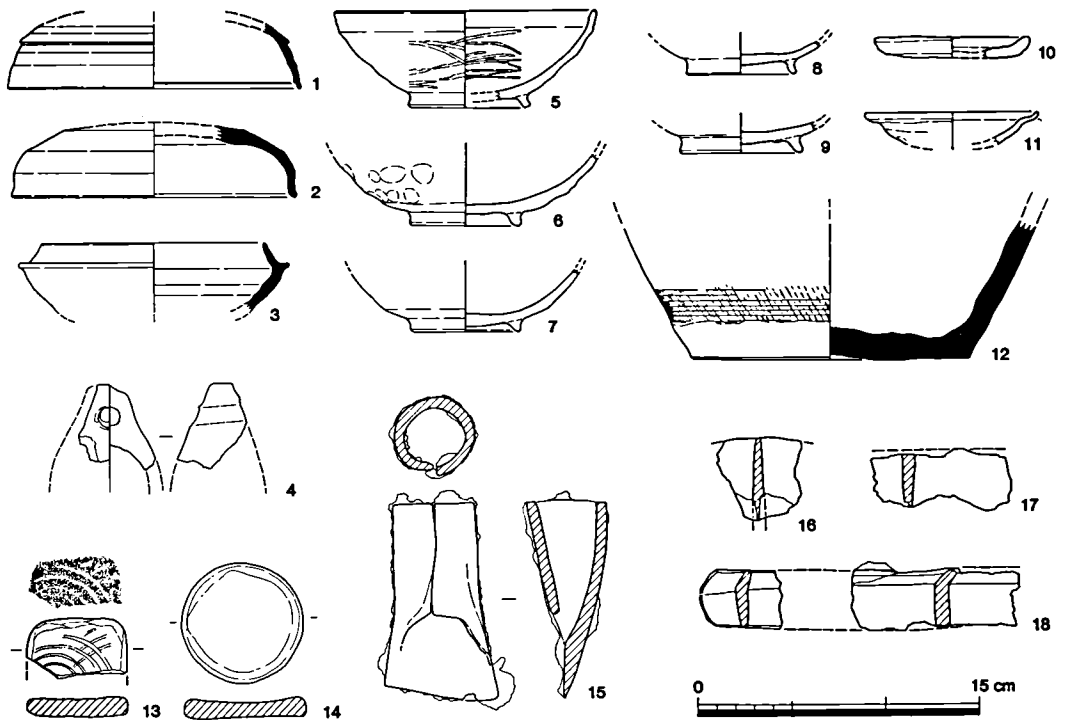
以上のように, 石敷き遺構に伴う遺物はほとんどが奈良時代のもので, なかでも須恵器の瓶・壺が多く出土している。昨年度の調査で目立った杯などの小型品の出土量は比較的少なく, 土師器や他の生活用品もほとんどみられない。また遺物の出土状況も, 石敷きとの関連とともに, 供献品としての性格を強く示しており, このことは三彩小壺の出土, あるいは底部穿孔のある広口壺のような儀器的な遺物の存在からも裏づけられよう。したがって, これらは何らかの祭祀に伴って用いられたものである可能性がきわめて高い。土錘や製塩土器ともみられる小型甕の出土は, 生活遺物というよりは, むしろ, それらを使用する生産活動の隆盛を祈念するような祭祀の状況を示すものとも考えられるが, 今後の類例の増加をまちたい。

(小澤 毅・鈴木康之)

ii) その他の遺物

a) 古墳時代の土器——須恵器・蛸壺 (第8図1～4)

古墳時代の土器としては須恵器・蛸壺が出土しているが, 量的には少ない。須恵器は杯蓋と杯身が出土している。杯蓋(1・2)はいずれも口縁部から体部にかけての破片であるが, 推定口径15.0cm～15.6cm, かえりを持たないものである。1は稜が明確に認められるものであり, 2よりも古い段階のものであると考えられる。2の頂部には回転ヘラ削りが, 他の部分には1・2とも全面ロクロナデ



第8図 第12～14トレンチ出土 その他の遺物（古墳時代の土器・平安～鎌倉時代の土器・土製品・鉄製品）

が施されている。杯身（3）はやや短く内傾するたちあがりをもつ形態である。底部を欠くが推定口径11.8cmであり、内外面には杯蓋同様ロクロナデが施されている。蛸壺（4）は宇治島北の浜遺跡の調査では初めての出土であり、下半部を欠くが現存で高さ4.6cm、推定径6.1cm、器体上端部にある穿孔は内径1.1cmのものである。

b) 平安～鎌倉時代の土器——土師器・瓦器・陶器（第8図5～12）

平安～鎌倉時代の土器としては土師器を中心に瓦器・陶器が出土している。土師器は高台付碗（5～9）がほとんどであり、他に皿（10・11）の破片が若干、鍋・甕の破片も出土している。高台付碗は内外面に磨きを施したもの（5）と、内面のみに不定方向のナデを施したもの（6～9）が存在する。口径を復元できるものはないが、高台径は5.5～6.2cmである。6は体部外面に指頭痕を残している。これらの高台付土師器碗は、吉備地方南部において数多く出土する「早島式土器」と呼ばれるものの範疇に含まれるものである。皿は底部にヘラ切り痕を残すもの（10）と第1次調査でも出土したが、瀬戸内地域での類例が少ない「て」字状口縁を有するもの（11）とがある。又、図示できなかったが、鍋は内面に横方向のハケ目、外面に縦方向のハケ目調整が施されており、甕は復元するには至らないが厚手のものである。

瓦器は第1次調査ではまとも出土していたが、今回の調査においては14片が出土したのみで、いずれも小片のため図示できるものはない。

陶器（12）は壺の底部が出土している。灰褐色を呈し、焼成はやや甘い。内外面にはロクロナデを施し、外面最下部の残存部分にはさらに斜方向の平行叩きを施した後、横方向のハケ目調整をしている。

c) 土製品（第8図13・14）

13は同心円状の当て具痕を残す須恵器甕の転用品で、重さ25gである。14は須恵器杯の底部の転用品で、重さ40gである。いずれも磨減が著しく、時期は不明である。

d) 鉄製品 (第8図15)

鉄斧(15)は完形品であるが錆化が進んでいる。鉄斧本体は最大長10.5cm, 幅4.4cm~6.05cm, 最大高4.3cmであり, 刃部は先広がりとなり片減りしている。これはヨキとして使用されたものであると考えられる。柄を挿入する袋部は断面が円形を呈しており, 鉄板の厚さは6mm前後である。時期は不明。
(高橋彰子)

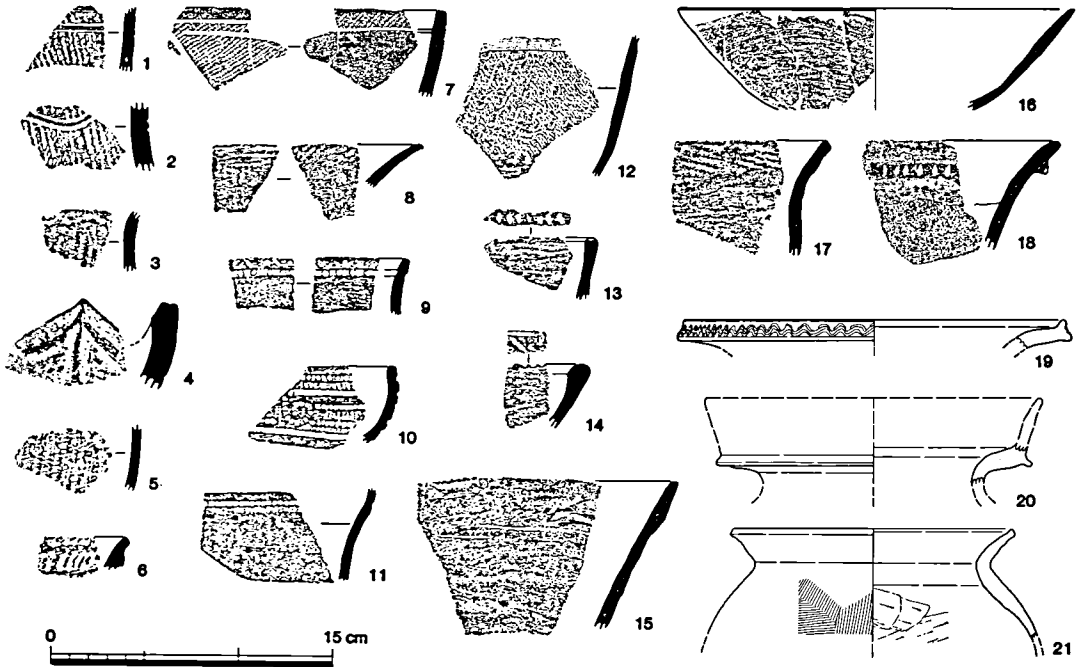
2) 第15トレンチ出土の遺物 (第9図・図版第5)

第15トレンチは調査範囲が限られており, 遺物出土量はごくわずかである。出土遺物には縄文土器, 弥生・古墳時代の土器などの土器類と安山岩の剥片がある。安山岩の剥片については特記すべきものがないので省略し, 以下では土器類について時代順に解説を加えていきたい。

a) 縄文土器 (第9図1~18)

縄文土器は中期(1~6), 後期(7~16), 晩期(17・18)の3時期のものがある。中期の土器は表面の風化が著しいものや, カルシウム分の付着したものがみられ, 出土レベルからみて海水の影響を受けているものと考えられる。出土量は少ないが, 船元Ⅱ式土器(4・6), 里木Ⅱ式土器(1~3), 船元式土器胴部(5)がある。

後期では後半の時期の土器が中心となっている。このうち7は口縁内面に縄文帯と界線をめぐらす。また12は結節縄文を胴部に施し頸部を無文帯としているが, 頸部と文様帯との境界は明瞭にされている。いずれも彦崎KⅡ式であろう。8は鉢形土器の口縁内面に縄文を押捺し狭い文様帯としており, 口縁端部をややつまみ出している。9は口縁内外面に界線のある縄文帯をめぐらし, 界線内に円形の押し引き状の刺突を加えるもので, 縄文は結節縄文であろう。10は鉢形土器の口縁外面に平行の沈線と渦状の沈線を組み合わせ, 沈線間は2本おきに縄文を磨消し, 沈線内に円形刺突を加える。11は頸部を無文帯とし, 円形刺突を加えた界線がめぐり, 胴部に施した縄文をほとんど磨消すという手法がとられている。これら4例は, 文様構成などから彦崎KⅡ式に併行もしくは含まれるものである



第9図 第15トレンチ出土 縄文土器・弥生土器・土器類

う。しかし9～11のような土器は、第1次調査でも出土しているが、他に類例がなく、今後注意する必要がある。口縁を内側へ肥厚させ、上面に沈線を施す鉢形土器(14)は福田KⅡ式ないしは津雲上層式(津雲A式)に伴うものであろうか。13・15・16は無文土器であるが、いずれの時期に伴うのか明確にし難い。

晩期土器は深鉢形で外面頸部以下にヘラ削り痕の顕著なもの(17)や口縁直下に刻み目突帯の貼り付く黒土BⅡ式土器(18)などがある。

b) 弥生・古墳時代の土器(第9図19～21)

19は口縁がやや肥厚し、端面に櫛描波状文を施し、口縁内外をヨコナデしている弥生土器で、壺ないし器台の口縁であろう。20は複合口縁の土器器壺口縁部でナデ調整が内外にみられる。21は内面頸部以下にヘラ削りを施し、口縁内面にヨコハケ、外面頸部以下に斜方向のハケ調整、口縁内面はさらにナデ調整が加えられる。

この他図示していないが、古墳時代以降の土器として製塩土器が若干出土しており、時期は古墳時代末～奈良時代前期、奈良時代後半～平安時代である。(小池伸彦)

調査の成果

宇治島北の浜遺跡は昨年度に実施した第1次調査において、三彩、緑釉などの施釉陶器、皇朝銭を検出し、それらを用いた奈良～平安時代の祭祀遺跡であることがほぼ確認できた。しかし、それらは顕著な遺構に伴われるものではなく、大石(70×35cm大)を中心に散在する石の間に、細片となった遺物が廃棄されたかの如き状態を示しているにすぎなかった。このため、今年度の第2次調査では、遺構に伴う形で、これらの祭祀遺物を検出し、祭祀の実態に迫ることを最大の目的とした。

遺構の検出

今年度の調査は、昨年度に祭祀遺物が集中して検出された調査区から、約30m東側一帯に調査区を設定した。ここは砂浜浜堤の東端にあたり、砂浜浜堤から自然山丘への変換点となる地点でもある。表層の砂層を除去すると、緩やかな傾斜面となった黒褐色砂質土上面に、広さ約10m²の範囲に拳大から人頭大の海岸円礫を敷きつめた、石敷き遺構が検出された。石の配置に規則性は認められず、かなり乱雑な状態に置かれ、1段だけの部分もあれば2～3段に石が重なる部分もある。石の集中する部分では、空隙は少なく、かなり密の状態に置かれている。この石敷き遺構の西端には、人頭大ないしはそれより大き目の石、4個をほぼ等間隔に南北方向に並べ、石敷き遺構を意識的に区画している。この石敷き遺構の近辺には巨石などは確認されていない。

この区画された石敷き遺構面上からは、須恵器を主体とする奈良時代遺物が集中して出土し、さらに石敷き面に近接して奈良三彩小壺が2個体分、破片となって出土した。須恵器は良質のもので占められ、奈良時代に限定でき、しかもその中の1個の広口壺の底部には焼成後穿孔がなされていた。このような状況から、この石敷き遺構は宇治島北の浜遺跡の祭祀に伴う遺構であると断定された。

遺構に伴う遺物

石敷き遺構に伴う形で出土した主な遺物には、奈良三彩小壺2個体分破片、須恵器(杯、鉢、埴、平瓶、長頸瓶、細頸瓶、広口壺、甕)、土師器、鉄器、土錘などがある。三彩小壺は身部だけで、蓋は検出されていない。須恵器類は広口壺が数量的には最も多く、5個体前後、他の器形は1～2個体、甕は小型、大型を合せて5個体分があり、総計20個体前後となる。須恵器広口壺のうち、最も遺存状態の良好な資料(第5図13)は遺構のほぼ中心部から出土したもので、底部を穿孔している。この周辺から大型甕の破片が集中して出土している。土師器は数量的には極めて少ない。鉄器は三彩小壺周辺から出土したが、原形復元が困難で、器種は不明である。土錘については、この遺構に直接関連するものかどうかは祭祀の対象を決定すると考えられるだけに、重要な遺物であるが、そのことについて

て明確にしえなかった。ただ、遺構面に近接して、平安時代末～鎌倉時代の土師器が出土しており、これらに共伴する可能性も考えられる。

宇治島北の浜遺跡における祭祀

宇治島北の浜遺跡では奈良～平安時代の、施釉陶器、皇朝銭など特殊な祭器を用いた祭祀が執り行われていたことが判明した。瀬戸内海は沿岸地域間の沿岸航路としてだけでなく、畿内地方と沿岸地方、九州地方さらには朝鮮半島、中国大陸とを結ぶ、国家の関与する重要な幹線航路であった。このため、瀬戸内海島嶼部には数多くの海神信仰の祭祀遺跡が残されていて、それらの多くは地域間あるいは国家間の交流の活発となる古墳時代以降の所産である。

この地域では、4世紀段階の祭祀の実態はよくわかっていないが、5世紀段階になると、大古墳の副葬品に共通する器物を祭器とする、祭祀が執り行われていた。たとえば、香川県荒神島遺跡、岡山県田井浦遺跡、愛媛県魚島大木遺跡などがある。魚島大木遺跡では、鏡、滑石製模造品、鉄鋌、鉄剣、土師器を用いた祭祀が行われている。魚島は燧灘のまっ只中、瀬戸内海のほぼ中央にある小孤島であり、沿岸航路に関する祭祀とは考えられず、遠距離航路のそれで、しかも祭器の組合せは強大な権力を背景にもつ司祭者を想定するに足りる。

このように、島嶼部の祭祀には古墳時代から、畿内政権に代表される中央政権が直接関与するものがみられるのである。こうした「国家的祭祀」が最も整備された形で執り行われるようになるのは、国家機構の整う8～9世紀以降である。特にこの頃には国策として、遣唐使が派遣されるようになり、さらにまた、租米などの大量運搬、高官の移動といった、国家の関与する海運活動が盛んになってくる。そして、これらの航海に伴い、その安全を海神に祈る祭祀が国家の関与する形で、しかも特異な祭器群を伴って行われるようになる。このような祭祀遺跡として、最大かつ最高の規模と内容をもつ福岡県沖ノ島遺跡をまず最初にあげることができる。岡山県大飛鳥遺跡もまた著名である。最近では、香川県櫃石島大浦浜遺跡、そして宇治島北の浜遺跡が追加されるに至っている。

沖ノ島遺跡は玄海灘に浮ぶ絶海の孤島であり、古墳時代以降、様々な祭祀が執り行われてきた。これらの祭祀を遺構の形態、祭器の組合せなどで分類すると、4分類でき、奈良時代以降のものは第3段階（半岩陰・半露天における祭祀、第5・20号遺跡）、第4段階（露天における祭祀、第1・2・3号遺跡）が相当する。前者では唐三彩、金銅製龍頭、鉄器、金属製雛形品、土器など、後者では奈良三彩小壺、皇朝銭、金属製雛形品、土器などが伴われる。

大飛鳥遺跡は東西に長い瀬戸内海のほぼ中央に位置し、地理的には宇治島に最も近接しており、宇治島北の浜遺跡の性格を知る上で重要な遺跡である。ここでは、8層に亘る堆積があり、中位の無遺物層を挟んで、上、下に6層の、奈良時代から鎌倉時代に至る遺物包含層がある。特に第6, 7, 8層は奈良～平安時代の特異な遺物を含んでおり、第6層では多量の須恵器、土師器とともに、緑釉片、鏡、鈴、隆平永宝、富寿神宝、貞観永宝、延喜通宝などが検出され、第7層、第8層は遺物の分離が困難であり、完形に近い多量の須恵器、土師器とともに、奈良三彩、緑釉、ガラス器、鈴、帯金具、把頭、鉄片、和同開珎、万年通宝、神功開宝などが検出されている。

祭器の出土状態は、三彩小壺を中心に皇朝銭9枚が伴うもの、平石を据え、周囲を石で囲む配石遺構を伴い、中央に三彩小壺蓋を置くもの、須恵器大甕の中に三彩小壺を納め、巨石の間に安置したもののなどが確認された。この遺跡では、山裾に近い地点では巨石が多く存在する。

大浦浜遺跡は長さ約400m、幅60～70mに及ぶ砂浜に営まれた縄文時代前期から中世に至る複合遺跡である。奈良～平安時代の遺構、遺物は浜の南東地区に集中してあり、製塩に関する生産遺跡と判断されたが、これとは別に、浜の北部（A地点）、中部（B地点）、南部（C地点）に特殊な祭祀遺物が検出されている。A地点では奈良三彩小壺蓋、和同開珎、神功開宝が狭い範囲に集中してあり、近くから金銅小札、隆平永宝も出土した。同時期の土師器、須恵器は伴わない。近接して1個の花崗岩大石（径1.5m、高さ50cm）が露頭している。B地点は三彩小壺が身部のみ単独で出土している。他に共伴遺物はみられない。C地点は金銅製絞具、青銅製丸柄、金銅製花形座金具、青銅小鈴、銅釘、

青銅製大刀貴金具，万年通宝，神功開宝，隆平永宝，長年大宝が出土している。ここでは三彩は伴わず，同時期の製塩土器包含層上面から検出された。

宇治島北の浜遺跡では，今年度検出した石敷き遺構に奈良三彩小壺身部，鉄器，須恵器を伴うものの，昨年度検出した，大石を中心として三彩薬壺片，緑釉長頸瓶子片，緑釉高台付椀，皿片，灰釉片，神功開宝，土師器，須恵器が散布するものの二者があり，前者が奈良時代，後者が奈良～平安時代の遺物で構成されている。この遺構の状況，遺物の組合わせなどの特徴は，沖ノ島遺跡の第3，4段階の半岩陰，半露天から露天における祭祀，大飛鳥遺跡での配石遺構，奈良時代に属する底部穿孔土器の存在などの諸様相に極めて共通するものとして把えることができる。

特に三彩の出土は，三彩の生産が中央政府の管理下におかれ，宮殿，官衙，寺院，墳墓など極めて限定された遺跡にしか伴わないことから，出土遺跡を中央政府との強い結びつきで把えることも十分に可能にする。そうしてみた場合，宇治島北の浜遺跡における祭祀行為は，やはり国家が関与していた第一級のものとして想定せざるをえない。

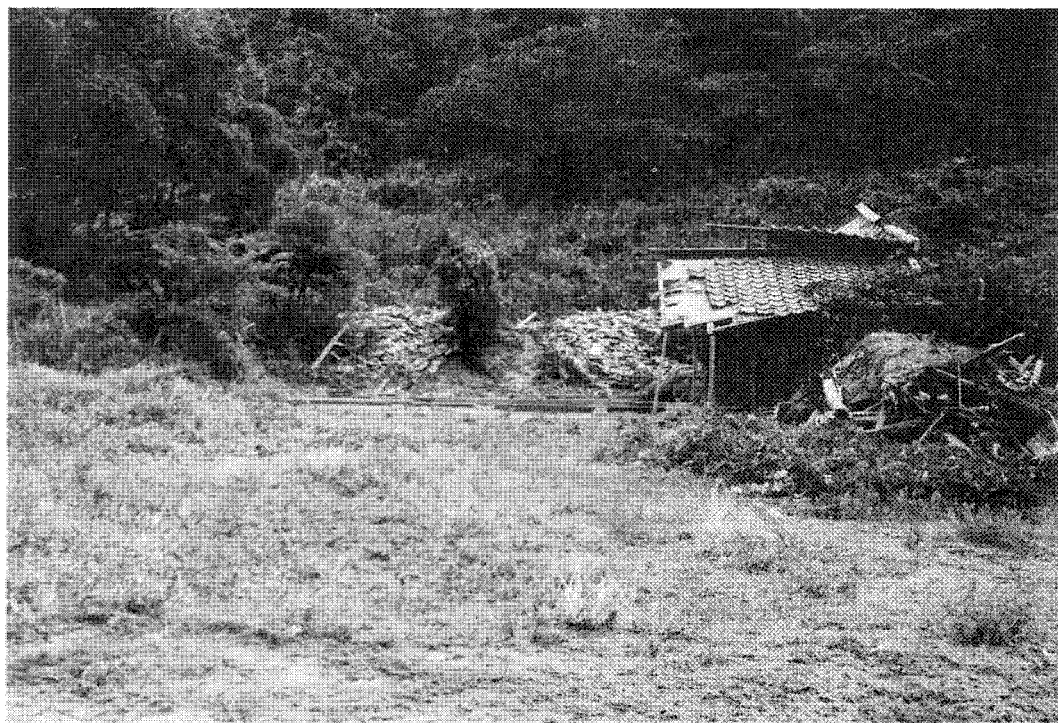
この祭祀の対象については，直ちに明らかにすることは困難である。ただ，宇治島の地理的特性は近在する大飛鳥と共通した内容をもっていることに注意したい。大飛鳥，宇治島の位置する海域は瀬戸内海のはほぼ中央にあたり，紀伊水道，豊後水道を通じて干満する海水は，丁度この海域を境に東西からぶつかり合い，そして東西に分れていく。このため，古代の航海には多大の影響を及ぼし，潮待ちが必然的に伴ってくる。この機会がこれからの遠路航海に先立ち，安全を祈る祭祀行為を執り行われたのであろう。大飛鳥遺跡は遺跡地が潮の干満によって砂洲が出現したり，消滅するという特異な自然現象をもつ。古代人がここに海神の存在を求めても何ら不思議ではない。このため，奈良時代以降，長期に亘って海神信仰の場として，国家が祭祀を執り行ってきた。この大飛鳥における祭祀は，国策である遣唐使派遣と大いに関わっていると考えられている。特に沖ノ島遺跡における祭祀が，北路をとった遣唐使関係のものとして想定され，国際情勢の変化で南路に変更となった時，この祭祀は衰微し，この頃から大飛鳥遺跡の祭祀が活発となるのである。そして，遣唐使派遣の終了する9世紀末にはその終えんを迎える。もちろん，大飛鳥における祭祀が遣唐使派遣のみを対象としたものではなく国内的事情によるものも当然あったであろうが，その識別は困難である。こうした大飛鳥における祭祀になんらかの事情が生じ，一時的に他に代替地を求めることがあったことも十分に考えられる。このような場合を想定すると，宇治島の存在は俄にクローズアップされてくる。しかも宇治島における祭祀は多数回に及ぶものではなく，祭祀回数は限定的といえるのである。こうした祭祀のあり方は，主たる祭場の大飛鳥において，突発的ななんらかの事情によって，一時的に祭場を他に求めなければならないことが生じ，宇治島がその代替地として選地された可能性が強く考えられるのである。ただ，この場合，祭祀の対象については現状では明らかにしえない。

次に宇治島北の浜遺跡では，祭祀遺構が奈良～平安時代の土器製塩遺跡と複合し，しかも石敷き遺構面上には土錘，粗製土器が検出されていることから，そうした海浜生産に関する祭祀の可能性が求められないかという問題がある。この点に関して，大山真充氏の興味ある論考がある¹⁰⁾。大山氏は香川県大浦浜遺跡の性格を分析し，三彩，皇朝銭，銅製品などを主な祭器とする「国家的祭祀」は三彩の有無で大きく二分できることを指摘した。そして，三彩を伴わないC地点の祭祀は製塩，漁撈などの海浜生産を対象とする，国家的祭祀とした。さらに，このような事例として，三重県鳥羽市費遺跡をあげている。これまで見落されていた非常に重大な指摘であるが，ただ，大浦浜遺跡の場合，A・B地点の祭祀とC地点の祭祀が三彩の有無とその立地だけで，その祭祀対象を明瞭に区分しうるものかどうか，今一つ，根本的な根拠が明確にされていない点に問題が残る。若狭，紀伊など他地域の塩生産関係遺跡における祭祀との比較検討が必要である。

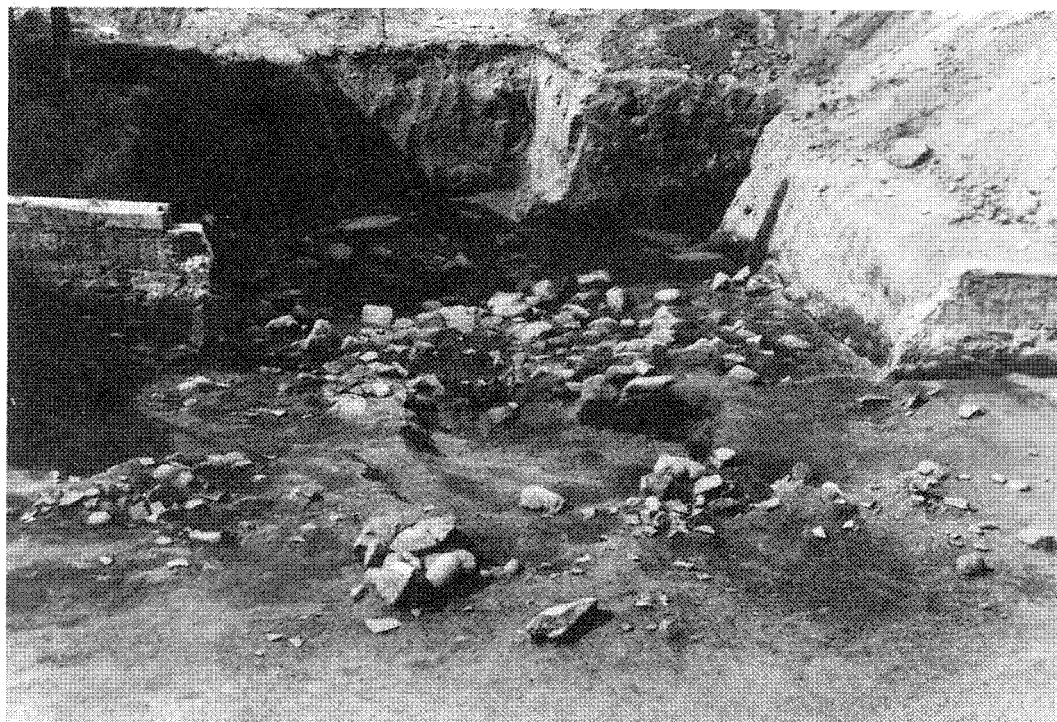
宇治島北の浜遺跡の場合，昨年度検出した大石を中心とする祭祀遺構は確かに，土器製塩，漁撈関係遺物の包含層上面にあるが，細かく検討すれば，約5cmの間層を挟み，しかも祭祀面上にはそれらの遺物は含まれない。また，今年度検出した遺構面上の土錘についても，遺構面上に近接して平安時



a 宇治島北の浜遺跡遠景（北方上空から）



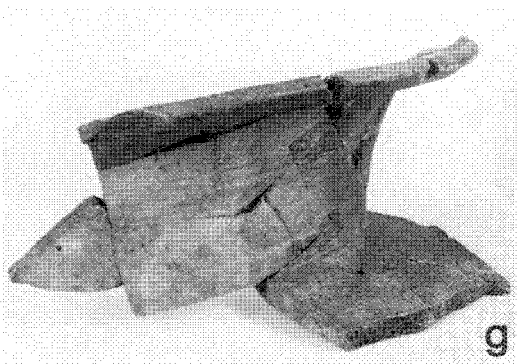
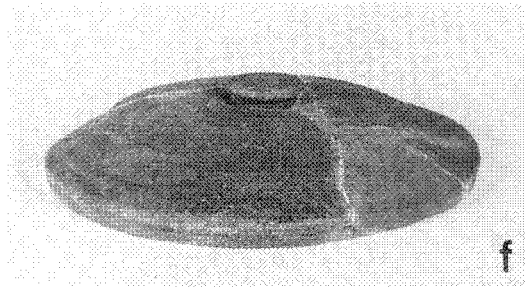
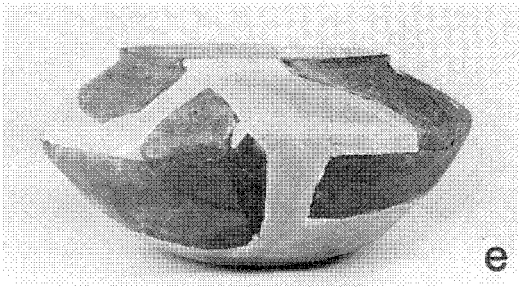
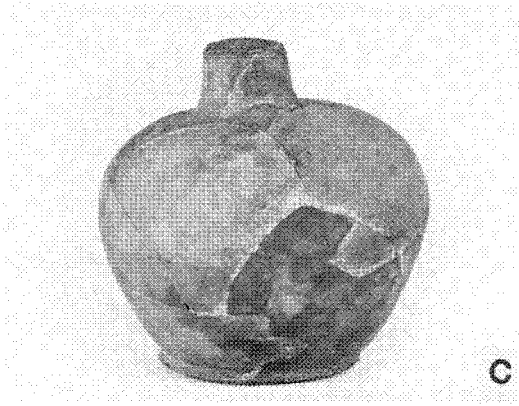
b 調査区（第12・13トレンチ）近景（調査前・西から）



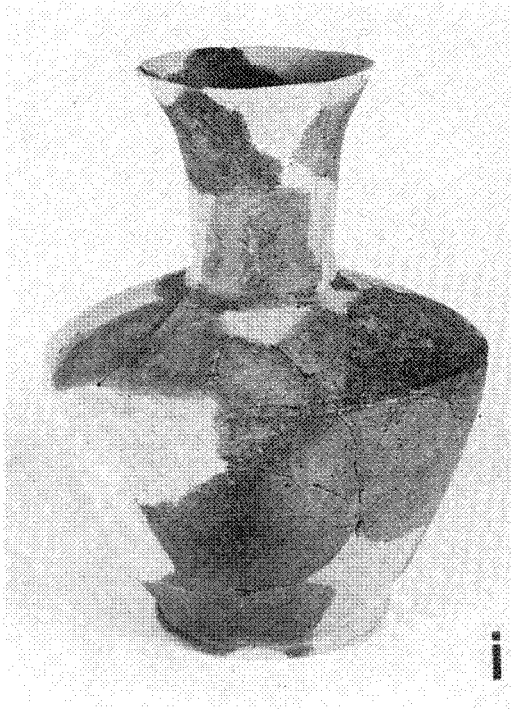
a 第12・13トレンチ 石敷き遺構及び遺物出土状況（東から）



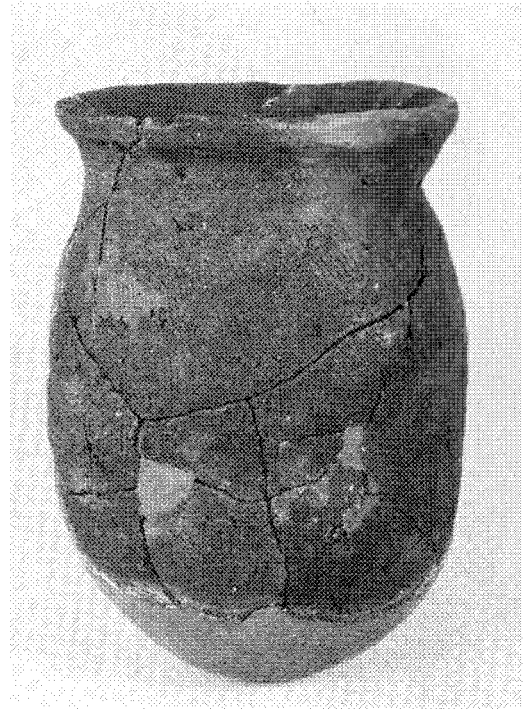
b 第12トレンチ 石敷き遺構及び遺物出土状況（北から）



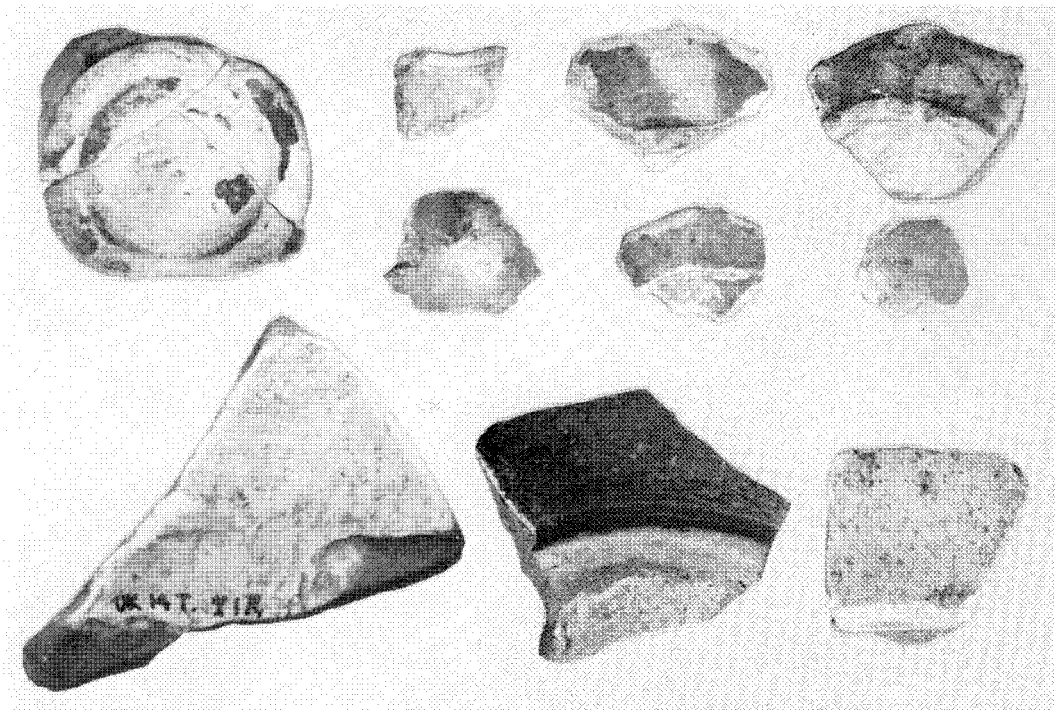
奈良時代の須恵器 (1) (hはgの肩部内面を部分拡大)



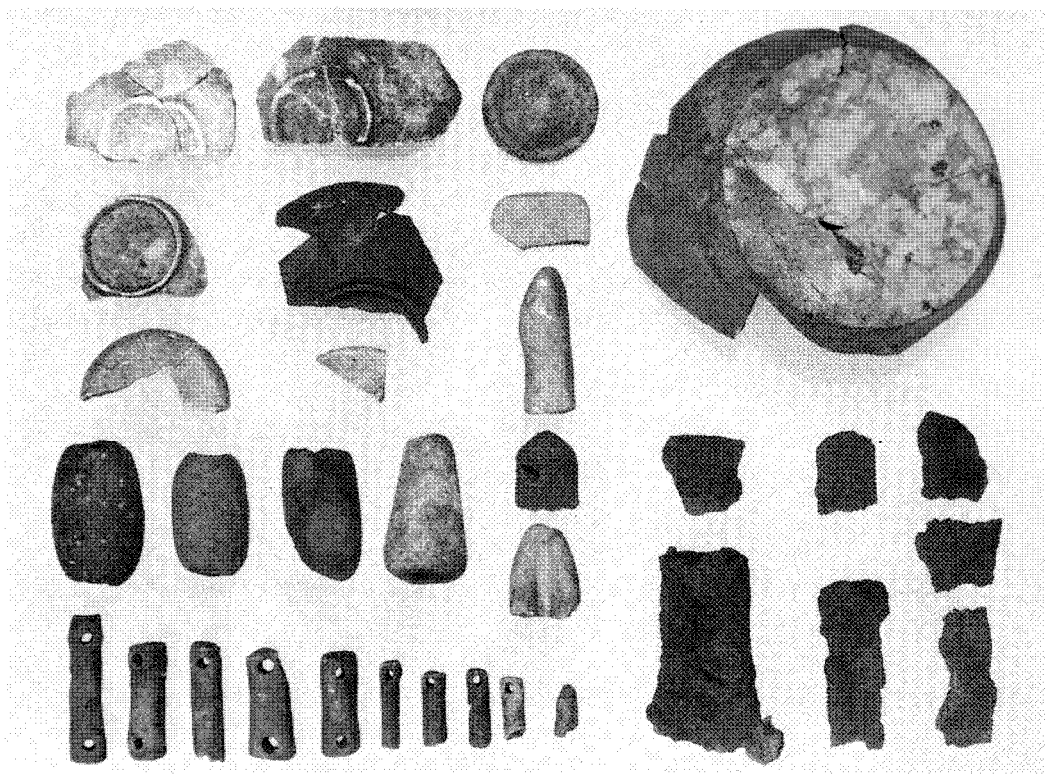
a 奈良時代の須恵器 (2)



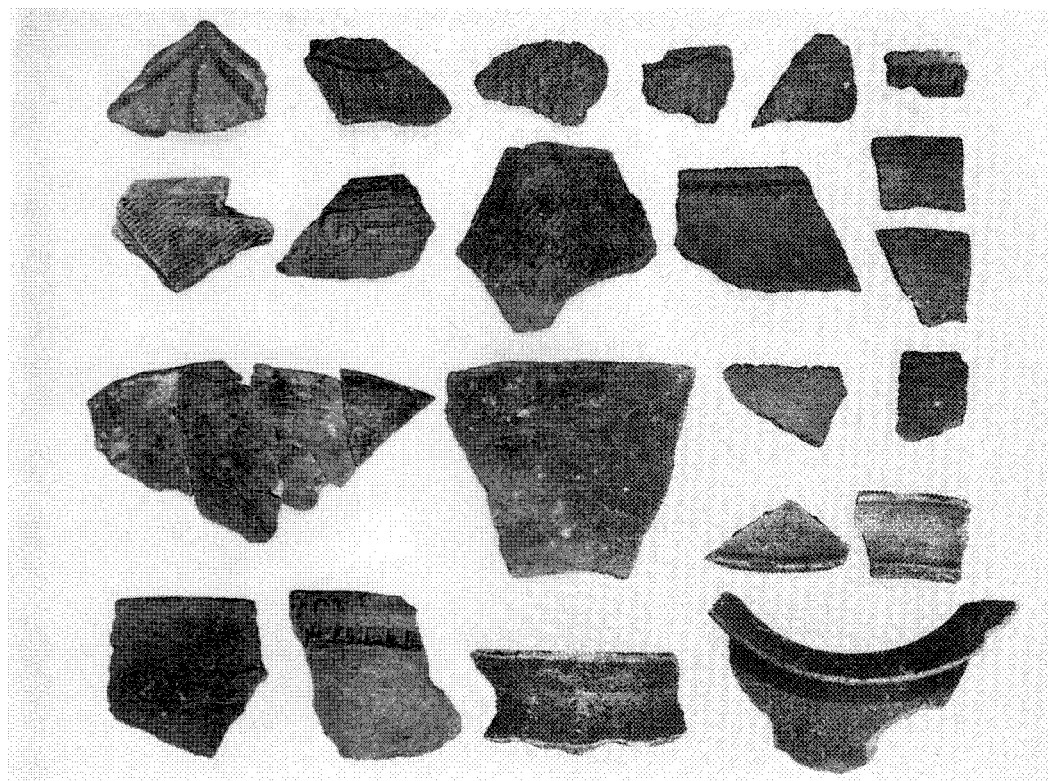
b 奈良時代の土師器



c 施釉陶器 (上段左端と上段右 6 点は三彩小壺, 下段は緑釉)



a 平安～鎌倉時代の土器，土製品・鉄製品



b 第15トレンチ出土縄文土器・弥生土器・土師器

代から鎌倉時代の土師器群が出土しており、それらに伴われる可能性もある。これらの諸点を総合してみると、この遺跡の場合、三彩など特殊な祭祀遺物群と在地の海浜生産活動を直接、間接に結びつける可能性は小さいといわざるをえない。

今回の調査にあたっては、前記調査参加者をはじめ、福山市教育委員会文化課赤塚弘光氏、柿原曠氏、上田靖士氏、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所松下正司氏、篠原芳秀氏、佐藤昭嗣氏、福島政文氏、走島町民宿太進館の皆さんにも多大のご協力をいただいた。また、香川大学教育学部丹羽佑一助教授には、資料の貸与など、いろいろご協力、ご教示をいただいた。縄文土器については、広島大学文学部助手中越利夫氏に細かなご教示をうけた。なお、写真図版に使用した航空写真は井手三千男氏の撮影によるもので、(財)広島県埋蔵文化財調査センター松井和幸氏から提供をうけた。記して感謝いたします。

なお、出土遺物の整理、実測、浄書は小池伸彦を中心に、広島大学大学院生小池やよい、小澤毅、鈴木康之、島立 桂、高橋彰子、竹広文明があたった。写真図版の製作は古瀬、小池伸彦が担当した。

(古瀬)

注

- 1) 川越哲志ほか「福山市宇治島北の浜遺跡の第1次発掘調査」『内海文化研究紀要』第12号 1984 pp.14—15.
- 2) 1)参照 pp.13—14.
- 3) 1)参照
- 4) 松本敏三「瀬戸内海をめぐる祭祀遺跡」瀬戸内海歴史民俗資料館編『瀬戸内の海上信仰調査報告(東部地域)』1979
- 5) 4)参照
- 6) 4)参照
- 7) 第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会 1979
- 8) 鎌木義昌・間壁忠彦『大飛鳥遺跡』倉敷考古館研究小報1 倉敷考古館 1964
- 9) 大山真充ほか「大浦浜遺跡の調査」香川県教育委員会編『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅳ, V 1981, 1982
- 10) 大山真充「香川・大浦浜遺跡の国家的祭祀について」森浩一編『考古学と古代史』 1982
- 11) 鳥羽市教育委員会編『鳥羽 贄遺跡』 1975